
東方薬師見聞録

五月雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方薬師見聞録

【Nコード】

N9047Y

【作者名】

五月雨

【あらすじ】

知らない間に、というか気がついたら見知らぬ森の中に飛ばされていた。

彼は、自らの名前すらを思い出すことができなくなっており、その場で自分のなまえを定める、『出雲』と・・・・・・・・。。時を同じくして、神々の住まう天界は荒れていた。

新しく作った世界に間違えて人を送り込んでしまう事故が多発していたのだ。

そんな事故の犠牲者の彼は、知らない間にチートをもらい、その力

で生き抜いていく。

この物語は『人』、『妖怪』、『神』とふれあい、『世界』を、そして『歴史』を見つめながら生きる彼を描いたものである。

出雲、異世界へ飛ぶ。（前書き）

どうも、寂しがりやの五月雨です。

ソードアート・オンラインと悩んだ結果、こちらにしました。

『武器と魔法と技術と知識は使いよう』や、『僕達のIS 』《イン
フィニット・ストラトス》』とは、ちょっと違った感じの主人公で
すので、おかしいところがあるかもしれません。

何か問題があった場合は、どしどし送ってください。

では、東方の二次をお楽しみあれ

出雲、異世界へ飛ぶ。

ここは・・・・・・・・・・どこだ？

さっきまで俺は自宅にいて、和室に日本刀を取りに行った。

その後、道場に行こうと扉を開けたらこれだ・・・・・・・・・・

俺は一人、森の中にいる。

べつに他に何かをしたわけじゃない。お地藏様を蹴ったり、神社の鳥居を壊したりなんていう罰当たりな行為は一度もしたことがない。それに、神様に会ったりしたわけでもなく、なぜか森の中にいる。良く森の木々を見ると、図鑑などで見たことのあるような樹ばかりだ。

なんと言えば良いんだろうか？

えーと、恐竜図鑑とかで見えるような感じなやつ、あれだ。んで、何で俺はこんなところにいるんだ？

冒頭にも言ったが、大事な事だからもう一回言つといた。

とまあ、そんな不運に合っている だ。

？あれ、俺。名前何だっけ？

やべえ、思い出せねえ・・・・・・・・・・。どうしたもんかなあ。

まあいいや、思い出せねえもんはしょうがねえ。新しく自分の名前ぐらい考えるか。

そうだな・・・・・・・・、苗字は後だ。

とりあえず、名前だけ決めておこう。

俺の出身は日本の島根県だった。

だから、昔の地名は出雲か石見だったわけだが・・・・・・・・。

石見なんて名前は格好悪いな。じゃあ、出雲だ。俺はこれからは出雲と名乗ろう。人と会えれば、の話だけだな。

まあ、なんだ……。腹が減ったし、なんか食つか。
出雲は、実のなった木へと歩み寄っていった。

そのころ、とある天界では……………

「ああああー……、やっちゃった。間違えて一人違う世界に送っちゃった。どうしよう」

一人の神が、パソコンのような機械の前で頭を抱えながら叫んでいた。

当然、その姿はとても目立ち、周囲の神が何事かと集まってくるありさまだった。

「どうしたの？」

様子を見にきた神の一人が、訊くと、

「間違えて違う世界に一人送っちゃった」

頭を抱えたまま、一人の神が答える。

「ああ……。多分×××のせかいでしょ？」

「何で分かるの？エスパー？某学園都市で教育受けてきた？」

「違うわよ……………」

一人の神の疑問はあつさりと切り捨てられる。

「まあいいわ。×××の世界はできたばかりでしょう。さっきからその世界に間違えて送り込む事故が多発しているみたいよ。送り込む時代は違うみたいだね……………」

「へえー……。じゃあ、アフターケアとかしなくても大丈夫かな？」

「ダメに決まっているでしょうがつつつつ」

天界に、小気味のいい、炸裂音が鳴り響いた。

「まったくもう、あいつも本気で殴ることはないだろうに。それだから男勝りとか言われて婚期を逃すんだよ。はあ……………」

×××のせかいだから能力でもつけてやれば大丈夫だよな？」

先ほどの、ミスをした神は、残像が発生するほどの速さで、キーボードに何か打ち込んでいた。

「えーと、いいや、とりあえずは『自然を操る程度の能力』にしておこう。この能力がどうなるかは、彼自信の努力によってだね。あとは、不老不死ぐらいでいいか？さあ、これでよーし」

陽気なままの声で、処理を終えた。

今後彼がどうなるうが、自分の責任だはないといわんばかりの明るさで……………。

まあ、もしこの神がそんな風に彼を扱ってしまえば、先ほどの婚期を逃してしまった神から肅清を受けるであろうが……………。

出雲、異世界へ飛ぶ。(後書き)

感想等を書いていただけると幸いです。

出雲のパーフェクト恐竜狩り教室（前書き）

どうも、寂しがり屋の五月雨です。

これまで僕が書いてきた二次とちがつておちゃら気が多いこの二次ですが、よろしく願います・・・・・・。

出雲のパーフェクト恐竜狩り教室

どうも、知らない世界に19歳の誕生日の日に転送された出雲だ。

まあ、このまえ暑いから風ふかねえかなあー。なんて思った
ら風が吹いて、もしかしてと思って気温が下げれと念じたら本当に
下がってしまったて驚いたわ。

で、まあ実験してみるべしということで雷落ちろと念じたらまじで
降ってきやがった。

いやあ……。冗談のつもりだったからけっこう近くに落とす
ちまって軽く感電した。良く死ななかったと思うよ。

で、どうやら、とりあえず人はいないらしい。

なぜかって？かんたんだ。

そこらじゅうに恐竜がいるからだ。

HAHAHAHAHA、さすがに最初に見たときはビビッタゼ。
でまあ、食われそうになったから雷落として殺した。

うん、まあ適度に焼けていてうまかったかな？

とりあえず不味くはなかった。

で、ここ最近、つかえることに気づいてしまった能力の鍛錬に当
たっているわけだ。

いろんなことを試してみたところ、俺は自然を操ることができる
しい。まあ、かなりいろんなことができる。

このまえは、恐竜の周りに酸素と水素集めて、そこに火を投げ込ん
でポポポーンでしてきた。

かなりチートな能力だけど生きていくのには不便じゃねえところか
かなり便利だ。

だから、なんだかんだいつでもこうしていきてる。まあ、あり
がてえ話だ。

んじゃ、いっちょいきますか。

雷の音で右肩の蝶……。ミュージックスタート。

ドカードカードカード……。

「こりや無理だな、さすがにもとの音が酷すぎる」

あっさりあきらめましたとき。

でもまあ、雷を同時にたくさん落したり、連続して落したりで
きることが判明したな。

まあ、それだけでも良しとすつか？

さあ、メシの時間だ。次に会った恐竜よ、スマンな。

だけど、おれも生き物だ。飯を食わずに生きてはいけない。恐竜の
肉と、そこらへんに成ってた木の実で食いつないでるんだ。

肉食か……。あれは凶暴なタイプなやつだな。

そんなに恐竜に興味なかったし、図鑑なんかと多少違うからわから
ねえけどティラノサウルスみたいな形したやつだ。

こういうやつは、味は少し悪いが、戦闘訓練にはなる。

「g o o e o e o w o w o w o o o o o o o o o o o o o o o o o o o
o o o o o」

「おいおい、少しはまともに吼えろつての……。」「

風の刃を作り出し、ティラノサウルス型の恐竜の首に当てる。

とうぜん、恐竜からしたら、あらぬ方向から衝撃を受けたことにな
り、そちらを向くが、何もいない。

「これは始めて使うんだよなあ……。だからうまくいくか
分からんけど」

ティラノサウルス型の恐竜を中心に、風が目に見て分かるほどに回
転し始める。

それは、ティラノサウルス型の恐竜の体を持ち上げるほどとなり、
数秒後には天高くその姿が見られた。

そして……。

ドギヤアアアアン

雷が、宙を舞っていたティラノサウルス型の恐竜を貫いた。

出雲のパーフェクト恐竜狩り教室（後書き）

感想などいただけるとありがたいです。

出雲、集落を見つける

ああ、ここに来てから何年経つんだろう・・・・・・・・・・・・・・・・。

時という感覚が俺の中でどんどん薄れていく。

もう、数百年ぐらい経っている気がする。どうやら、とりあえず俺は不老だ。それだけは自信を持っていえる。

じゃなきゃ、こんなに長く生きられないし、姿が全く変わらないのはありえない。

ただ一つ言えることがある・・・・・・・・・・。

自分ひとりの世界はつまらん。

確かに、恐竜がいるが、別に会話できるわけじゃない。

食う側と食われる側の関係だけだ。

自分の能力もほぼ完全に使いこなせる。

もう、何かをするにも事務的な行動になってきちゃった・・・・・・・・。

はは・・・・・・・・、

「人が懐かしいな」

夕闇に沈みかけた世界で小さな波紋が広がった。

ああ、どうも。出雲だ。せめてもの娯楽にと酒を造ってみたが・・・・・・・・。

飽きてしまった。最初の数年は良かった。

創意工夫というものがあって、久々に色々と考えさせられたりもし

た。

完成してから何年かも、味の改良とかで夢中になれた……………

だけど、それも過ぎれば飽きてしまうものだ。

と、まあ、森を歩いてるわけだ。

なにも考えなしに歩いてるわけじゃないぞ。なんかこつちからいい匂いがするんだよなあ。

なんていうんだっけ？ほら、あの白黒や茶色で、角の生えた生き物。えーと、…………。まあ名前はどうでもいいが、あれを焼いたような匂いがするんだ。

なんつうんだろうな、いい匂いって感じだけじゃなくて、懐かしさも感じられる。

勘違いかもしれないが、ちょっと気になるんだよなあ……………

まあ、この時代に人間はいるわけないか。未だに恐竜の跋扈している時代だもんな。

あー、でもこのまえヘンなの居た。蜘蛛の脚持つて、体が人で、頭がティラノサウルス、両腕がカニのはさみだった。

まじで気味が悪かったから雷で焼こうとしたら、一発で焼けなかった。

あんなマジな戦い始めてた。

最終的にあいつの体の表面を水でぬらしてから、雷の雨を鬼のように降らしたら30分後ぐらいに止まった。

やっぱり気持ち悪かったから屍骸は水素と酸素でポンしといた。で、結局あれなんだったんだろうねえ？

あのあと、数日後に見に行ったら屍骸がなくなってたしね。余計に気になるよ。

もしかして復活したとかだったら面倒くさいことこのうえない。ん、匂いが強くなった。

そろそろか……………。

顔を上げた出雲の前に広がっていた光景は、戦国時代ぐらいの人の集落だった。

出雲、集落を見つける（後書き）

感想などをいただけるとありがたいです。

何気なく勢いで書いている小説なので・・・。。

出雲、怪我をする

人里だ・・・・・・・・。。。

塀に囲まれた中の建物の集まりからは、子供のはしゃいでいるような声が聞こえる。

なにか食べ物を焼いているような匂いや、煙も上がっている。

戦国時代みたいな建物だが、取りあえずは人の集落だ。

いやあ、もう、縄文時代始まってたんだな。気が付かなかった。いくら山を挟んで反対側のこととはいえ気が付けなかったのは残念だな。

「つて、ちよつとまで、おかしいだろ」

やべえやべえ、おもわず独り言を・・・・・・・・。

とうかまだ恐竜生きてるし。

どの教科書にも恐竜と人類が同時期に生きていたなんてこと書かれてなかったぞ。

ただ単に、まだその遺跡が発掘されていないから分かっていないのか。

それとも、その事実が判明すると問題がるから隠ぺいされているのか。

もしくは考古学者が遺跡を見つけていても年代を間違えていたり、素人が見つけたことに怒りを感じて嘘の発表を行っているかのどれかだろ。まあ、中にいるのが人ならという話だが・・・・・・・・。というか人だよな。人以外はまずあり得ないし。

「まあいいや、とりあえず門でも探して中に入らしていただくか」

「おい、門に変な妖怪が来たらしいぞ」

「なんでも人の姿をしているとか……」

「妖怪も進化しているのか？」

「分らん」

「まあ、なんにせよ、汚らしい妖怪なぞという種族は」

「……殺してしまえ」

「……根絶やしにしてしまえ」

「皆の衆、武器をとれ」

「……応っ」

塀の内側のある広場のにいた男達の会話より、抜粋……。これが村長を中心とする、人里の大多数を占める大衆の意見であった。

「う、うつつうつるさい。さつさと森に帰れ妖怪」

「だから俺は妖怪じゃなくて人間だって、失礼だな」

「どうやら俺は、森から来たせいで妖怪と間違われているらしい。で、自分は人間だって言っても信じてもらえず、弓まで向けられている。ありさまなのだが……」。

「いい加減に信じるよ。それにそんな構え方じゃ矢を放てねえだろ。自分に弓の弦が引つ搔る、だからもう少し体から弓を離して構えろ。そうすれば上手く射れるようになるぞ」

「だ、ま、れー」。さつきからお前のせいで調子が崩されつばなしだ、妖怪。さつさと森に帰れ」

この弓すらともに構えられていないバ力な銀髪っ娘の門番に入れさせてもらえない……。時間の無駄だ。まあ、バ力なこいついじるのも楽しいんだけどな。

というか……………。

「おまえ、戦いに関してはド素人だろ」

「!!!!」

どうやら、凶星みたいだ。いやあ、にしても見ていて楽しいな。顔を青くしたり、赤くしたり、冷や汗を物凄い勢いでかいたり……………。

「怪人20面相？」

「違うわよ！」

あんまりこうやって戦いのさなかに喋るのは戦慣れしているものとしてはおかしいんだよなあ……。だから素人ってばれだし。それに少しはポ・カーフェイスを身につけないとそこをつけ込まれるぞ。

「お前面白いな。名前は？」

「妖怪が普通に名前を訊くなああああ」

本当に馬鹿だ……………。

まあいいか、みんながみんな感情を殺すようなやつだと誰も楽しくないしな。こういう奴がいたほうがみんな楽しいだろ。

「ふーん、俺は『人間』の出雲だ。よろしくな」

「よろしくないわつ。あんまり人間のふりをすんな。妖怪ってばれだし」

「だから妖怪じゃないっての……………」

前言撤回、馬鹿すぎても大変なだけだ。

はあ、誰か俺を人間だつて認めてくれる奴いねえかな？

そろそろ中に入りたいし、腹も減ってきた。

「なあ、いい加減に？かはっ？」

何で俺の脇腹に矢が刺さつてんだ？あの銀髪は射つてねえ。じゃあなんで？

ヤバいな……………脇腹の痛みが半端ねえ。

血もどんどん流れてる。この状態で森の中に入ったら、恐竜や妖怪を引きつけて、怪我の影響で口々に戦えずに餌になって終わりか……

「……………」

「永琳、下がっておれ。後は我々がやる」

「そ、村長？何故ここに……」

「お前が妖怪を殺ってないって聞いたからな」

「阿草^{あくさ}さんまで!？」

「俺達もな……」

「な、なんでみなさんが」

「そうか、あの銀髪っ娘以外の里の奴が来たのか。それで妖怪と勘違いされたままの俺は射られた、と。」

「それもだが、妖怪だからって普通に殺していいもんかよ。俺だつて襲われた時しか妖怪は殺してないぞ。恐竜は襲われた時と飯の時だけだな……………」

「行きなさい、あなたがもし本当に妖怪でないのなら早く逃げて」

「何を言っておる永琳。人間はこの里にしかおらんだぞ」

「……………そうだ……………」

「へえ、あの銀髪っ娘、永琳っていうのか……………」

「わりいな、永琳とやら。森に逃げさせてもらっ」

「それだけ言つと、出雲は森の方へと逃げだす。」

「永琳、何をしておるのだ。ええい、皆の衆、射れ、射るのじゃ」
村長が喚くとともに、村長に追従していた男衆が矢を射るが、しっかり狙えていないのか、見当違いの方向へ飛んでいくものすらある。そして、その間に出雲は森の中へと入り込んだ。

「やばいな。意識がもうろうとしてきやがった……………。はは、森の中に逃げて最期……か……。まあ、あいつらに首をとられるよりはマシか。永琳とかいうのには悪かったな。過ぎたことは悔やんでも無駄か……………」

ははは、参ったな。こりゃ。あっちの藪がガサガサと揺れてやがる。
もうなんか来たか・・・。

「お、おい。大丈夫か人間。おい、誰か来てくれえ」

俺が最後に目にしたのは、不思議な格好をした人型の生き物だった。

出雲、怪我をする（後書き）

早いかもしれませんが、永琳出してみました。

というか多分ですけど口調違いますよね？

原作を実は持つてないので分からないのですが、取りあえずの設定は、昔だから。ということにしておいてください。

感想など頂けるとありがたいです。

ついでに東方のキャラの口調を教えてくださいただけると嬉しいです。

どうやら鬼の屋敷か？

「まだあの人間は目を覚まさないの？ンブッ」

「ああ、しかしなあ・・・・・・・・・・。ゴクッゴクッゴクッ、何で人間なんか助けたんだ？」

「ぶふあー、さあなあ・・・・・・・・・・。なんかあいつは他の人間と違う気がしたんだ」

「なるほどな。にしてもングングッ、目覚めるのが遅すぎないか？あの日からもう一週間は経つだろう？」

「いや、今日で10日目、ふう」

さつきから意識がだんだんと戻ってきた。

けどまだ、目を開くことができない。

んで、どうやら頭の方に居る奴らの話を聞いていると、もう10日も経ったんだとか・・・・・・・・・・。

俺良く寝てたなあ、そんなに。

それに・・・・・・・・・・。『俺は生きています』。

まあ、話を聞いている限りの感じからすると、この人たちに助けられたみたいだが。この人たち以外にも、あちらこちらでドタバタと走ったりする音が聞こえてきている。

別の集落の人間に助けられたのかって思ったが、どうやら違うようだ。

妖怪かなんかだろう。妙に酒臭いから鬼か？

どうやら俺を食べるつもりではないようだし、もう少しゆっくりさせてもらうか・・・・・・・・・・。

俺の意識は、ものの数秒もかからずに再び深き暗闇へと吸い込まれていった。

「さっきほんの少しの間だったけど意識が戻っていったな」

「ええっ！？なんでその時に教えてくれないの、葉華ようかあ」

葉華と呼ばれた二つの角が生えた少女は眉をひそめると、自らの正面に居る少女におまえなあ、といってからじぶんの考えていることを伝える。

「美月みつき、おまえは目が覚めたばかりのこいつに酒飲ませる気だっただろ」

「何か悪いの？」

美月と呼ばれた角が一本の少女は、何がおかしいの、と表情かおに書きながら首をかしげる。そんな様子を見て葉華が額を抑えても、自分のどこが悪いのかを自覚していないようだった。

「こいつは私たちみたいな『鬼』という種族じゃないんだぞ。病み上がりに酒なんて無理だ」

「ええー、そんなあ」

「四天王なんだから少しは知恵をつけろ」

「知恵が無くても勝てるもん」

ほお、と葉華は小さく口に出すと、顔にどこか悪戯が好きな子供のような表情を浮かべながら、美月を見る。それと同時に彼女の手は何やら怪しい動きになり・・・、葉華は美月へ飛びかかり、押し倒した。

葉華の手は美月の衣をはぎ取り、彼女の素肌に触れる。

「ひゃっ、や、やめっ」

美月は抜け出そうともがくが、葉華はいつさい動かず抜け出すことができない。

葉華の指は、美月の素肌を舐めまわすように素早く蹂躪する。しか

し、急に速度を変えたり、触り方を変えたりと、多彩に動き方を変えていた。

「ひゃんつ」

美月は顔を真つ赤にしながらなおも抜け出そうと暴れていたが、葉華がわざと耳に温かい吐息を当てると、その動きも止まってしまふ。抵抗がなくなり、蹂躪しやすくなつた素肌をさらに多種多様な動きで指が蹂躪し……。美月が限界を迎える。

[illegible]

「ほらみる、私に勝てんではないか」

ようやく葉華のくすぐりは終わったのであった。

鬼には準うつ病患者がいるらしい。(前書き)

慣れない携帯投稿

鬼には準うつ病患者がいるらしい。

どうも、出雲だ。

また目が覚めたから今度こそ起きようと思って上体を起こしたんだが……どうしてこうなった。

俺の目の前で二本角が生えた女子の鬼が着替えている。

そして、目が合ってしまったようだ……。まあ、とりあえず。

「ここはどこだ？」

あえてツッコミ(=ω=)は入れないことにした。たぶん気にしたら負けというやつだろうからな。

「きやああああああああああ」

どうやら意味はなかったらしい……。……
……。はあ、残念だ。

「じゃあここは鬼たちがすむ山の屋敷の1つなのか」

「あ、ああ。うん、そうだ」

手を後ろで縛られた1人の黒髪の青年と、顔をどことなく赤く染め上げている二本の角を生やした白髪の少女が、とある屋敷で対話をしていた。

「ところで……。この縄、いつになったら解いてくれる？」

「ほ、解いてなどやらん！」

「いくらなんでも酷くないか？」

「うるさいケダモノ。私の裸を見て発情しおつて」

発情した覚えはさらさらないんだがな……。何百年も1人で生きてきたせいだろうな、全然そういった感情が湧かないしな。

「別に発情した覚えは無いが？」

この前のバカ門番もそうだったようにどうせそんなに人の話は聴かないだろうが言うだけ言っておく。自分の精神衛生上のためにな。

「どうせ私は母さんみたいな巨乳じゃなければ、美月みたいな口リボデイでもないさ。別に特徴できなところなんてないショボい体だし人間の男にすら発情されないのさ。悲しくなんてないさ。哀しくなんてないさ。寂しくなんてないさ。泣いてなんかないさ。悔しくなんてないさ。淋しくなんてないさ。ああ、なにもないさ。胸だつて平均ぐらいしかないさ……………」

「お、おい。お前大丈夫か？」

うつ病とは違うだろうしな。大丈夫なのか、鬼つてのは。まさかみんなこんな準うつ病患者じゃないだろうな？

そんな出雲が疑問を抱くなか、時は過ぎていった。

鬼の里にて

どうも、年寄りの出雲だ。

どうやら今日は鬼達の訓練場のある、山の中腹まで行くらしい。

これまでいた屋敷は、そこより300mぐらい低い位置にあった。

「なあ葉華、あそこの里の人間はなんで妖怪をいやがるんだ？おれも妖怪っぽいのを殺したことはあるが必要最低限しか殺してないぞ。それに比べてあいつ等はいまにでも殲滅しようという勢いだっじやねえか」

助けられる前から気になっていたことだ。銀髪門番の奴は妖怪だからだっと思ってたが、理由が分かん。怖がる必要もいやがる必要も俺には分らないんだが………。

というわけで葉華に訊いてみたんだが。

あ、そうそう、葉華つてのは裸を俺が見ちまった鬼だ。

「………『怨み』だ」

葉華はそういうと、表情を暗くする。先ほどまでは楽しそうな表情を浮かべていたというのに一瞬で大きく変わってしまった。

『怨み』もしくは『恨み』……、だれでも持ったことがあるのではないだろうか？

たとえば、あなたが学生だったでしょう。

自分よりも悪いことをしている奴はたくさんいるというのに、先生はあなたばかりを怒る。当然、あなたは先生と、自分より悪いことをしている奴らに対して苛立ちを覚えるだろう。一度ぐらいなら恨みまでは発展しないかもしれないが、何度も繰り返されれば………。
………。あなたはその先生と、他の生徒を『怨んだ』だろう。

社会人ならば、自分と同期で入ってきた奴が、自分よりもまともな仕事をしていないというのに、会社の上役にそいつの親がいるという理由だけでどんどん出世していく。これは生活にもかかわってく

る問題だ。あなたは『怨む』だろう。

だれでも一生に一度はもつであろう小さなことだ。

しかし、それは自分個人の一生や、自分の周囲の運命を操るだろう。そして、歪めるだろう。怨みとはそういう存在だ。

そして、今は怨みによって、人間の里と妖怪は相容れぬ関係になっている。

「むかしな、まあむかしといっても100年ほど前の話だが。この山よりももっと人里の近くに草原があっただろう？」

「ああ、屋敷から見えたな」

それは広いこと広いこと、里と山の間の距離が目測で『10km』
overってところだったんだが、その間100mぐらいを除けば、
全部草原だった。里の周囲100mぐらいは森に囲まれてる。で、
里を挟んでこの山の対角線上に当たるところは山脈になっている。
そこより向こうに、俺はこれまで住んでいたんだけどな……………
……………。

で、草原には、どうやら背の高い草もあるらしく、高い草は6mにも及ぶとか。

「今は30もないがクマの妖怪がいてな。当時は1500以上はいたんだ」

「おいおい、いくらあの草原と言ったって……………。クマの妖怪を1500以上は養えないだろ」

クマの妖怪は、確かに形はクマだ。形は……………。大きさは、成長したヤツが立てば大きいもので10mはあった。そんな奴が食べる量はすさまじい勢いだ。立つ鳥跡を濁さずとはいったものだが、本当にヤツらの後には何も残らない勢いだ。

「もちろんだ。むかしはもっと里も大きく、今以上に活気があったんだが……………」

「ヤツらが襲ったと」

「そのとおりだ。柵を壊し里に入り込み、家を壊して人を喰らう。抵抗もしたようだが当時の武器ではとてもではないが齒が立たなか

った。一瞬のうちに里の半数以上の人間が死んだ。ヤバいと気が付いたらしく、ばらばらになって逃げ込んだ先がちよつとした林だったようだ、林の中にはクマどもは入れん。ヤツらを知っているということは分かるんだろう？」

ああ、ヤツらはその力と体のせいで、

「森の中に入るには体が大きく、無茶をして入れば大きな傷を負うからな」

「その件を境に人里の者たちは妖怪を怨んだ。そして人の中に妖怪退治を専門にする者たちが現れ始めてな、そいつらとそいつらの加護を受けた武器を手を持った連中がクマの妖怪を狩り始めあつという間に今の数だ。おまえに放たれた矢もそいつらの加護を受けていたよ。妖怪にとつては完全な毒だが、人間にとつてはそこまで危険ではない、有毒ではあるがな」

「なるほどなあ……」

そういう歴史があつたからあんなに里の連中は妖怪を毛嫌いしたのか。

つて、ちよつと待て。

「その加護とやらが人間にも有毒ならなんでおれは生きてるんだ？」

「ああ、門番の銀髪娘が薬師だったらしくてね、物見の鬼が里の様子を見に行ったときに、森の中に薬が置かれてたんだよ。書きおき付きでね。で、あの門番の娘がお前のために作った解毒薬だったから遠慮なく使わせてもらつたのさ」

「……。2回も助けられたのか……」

何度お礼を言っても足りないくらいだな。

どうしたものやら……。

「お、着いたよ」

葉華の指さす方には、たくさんの鬼が一つの大きな広場を囲むようにして座っていた。

「折角だし言っておこうか。ようこそ、鬼の里へ」

大自然 『薬師出雲』 V S 鬼神 『大雉牙煉』

「ほう、そ奴が人でありながら人里に住んでおらんという・・・」

「変わった奴だな」

「あらあら、おもしろいじゃないのさ。・・・でもよくこれまで生きてたもんだねえ」

「強いんじゃないの？」

「じゃあやりあうか？」

「まずは鬼神様からさね」

「どーでもいいや、いまの人間になんて興味ねえよ」

「随分連れないこと言うじゃないかい」

鬼つてのは好き勝手な奴が多いらしい。一応、俺がここにいるのを待つてはいたみたいだが、みな口々に俺の評価を始めている。まあ、鬼評価されるなんて一生に一度あるかどうかの珍しい体験だろうしひよかを受けとこうじゃないか。なんて思っていたんだが、あんまり評価というより誰から戦うかの話に変わってる気がする。

本当に気楽だな、草原のクマ妖怪が全滅すれば次に狙われるのはこの鬼達だろうに・・・。。。

まあ、どうせおれも家まで帰る気はないしここに居座ろうかと考えていたから一緒に人間と戦うんだろうけどな。

「で、俺は戦えばいいのか？葉華」

「はあ？あんたみたいな弱い人間が戦ったら死んじゃうよ。あたしら鬼とはレベルそのものが違うんだから」

葉華は何をバカなことを、という顔を向けては来るが・・・。。。

「でもあちらさんがたはやる気みたいなんでねえ」

どうやら俺を待つていた鬼の大半の理由は俺と殺しあうことらしい。

相手の強さを知るために相手と殺しあう。さすがは妖怪の中でも種族そのものが最高レベルの強さを誇るだけはある。

「おまえら……。バカか、こいつは人間なんだぞ」

葉華は声を荒立て、他の鬼達を帰らせようとする。

自分で行っていた限りは、葉華は鬼の四天王という奴の3番らしい。で、俺が一瞬だけ目を覚ました時にいたのが2番だったとか……。あんなちびが？とはおもったが、見かけには寄らないということだ。俺だつて見た目は18とか19そこらにしか見えないが実際は600年は生きてるもんな。

「ふん、とはいえしきたりを忘れたわけではあるまい」

「そうだ、この山のしきたりをな」

「何の問題があるってんだい？」

「いや、だがこいつはにんげ「葉華よ、我らが山のしきたりを忘れたか」き、鬼神様！」

ん、どうやら四天王より上っぽい存在か……。

つてことは実力社会の鬼の世界。

鬼の頂点、鬼のかしら……。か……。。

「で、しきたりつてのはなんなんだい？」

出雲は顔に子供のような笑みを浮かべながら口にした。

それを鬼神は認めると、

「鬼の強いものから順に新たにこの山にすむものは戦っていくというしきたりだ」

同じく子供のような笑みを浮かべながら返した。

二人の間に種族という怨みは存在しない。

存在しているのはただ一つ。

こいつはどれだけ強いんだ？

ただそれだけ。好奇心だけである。

「面白いしきたりだ。人のみだが挑戦させてもらおうか」

「ほう、いい度胸だな。お主、名はなんと申す」

鬼神に訊かれた質問に一瞬だけ出雲は固まる。彼は名字を持ってい

ない。否、思い出せない。だから何と言っているのかが分からなかったのだ。だが、次の瞬間には返答が決まっていた。

あいつ、銀髪門番の永琳は薬師だったな……ならかんだ。

最初のお礼は

「『やくし いずも 薬師出雲』だ」

俺の名字にするさ、お前の仕事をな。

「良い名だな。我はこの山の頂点、鬼神の大雉牙煉だ」

「じゃあ、おっぱじめっか」

大自然を司るものと、鬼達の頂点はついに激突した。

古之大魔法雷

「おおおおおおおお」

周囲の鬼達が下がるより前に二人は闘いの火蓋を落とす。

牙煉は右手を腰の位置に下げ、一突き。たかがそれだけ、されどそれだけ。

空気が急激に圧縮され、伸びる場所を探してそのまま飛び出す空気の砲弾と成して……。

「すごいな、ただの一突きでそれとは……」

牙煉がただの力が強いものではなく、高い技術も持ち合わせていることに気付いた出雲は体をそらして空気の砲弾をかわすと、反撃に無数の空気の砲弾を返す。

こちらは、牙煉のようにして作ったものではなく、能力で作ったものであるのだが……。

「むっ!？」

威力は牙煉の放ったものに勝るとも劣らない。鬼とはいえ、喰らえばただでは済まないだろう。

これぞ600年の年の功といえるだろう。とはいえ、空気の砲弾は最初の30年ぐらいで完全に習得していたのだが……。

牙煉は全てを紙一重でよけると、右手に妖力の弾を大量に生成し撃ちだす。

「……マジかよ」

出雲はそうは言いながらも、自らも霊力の砲弾を大量に生成し相殺するように撃ちだす。

二人の間で、鮮やかな弾幕がぶつかり、爆ぜる。それは虹を見ているようであった。いや、虹というより多彩なオーロラだろう。一時としてまったく同じ姿は見せない。急激に姿を変えて見せたり、緩やかに少しずつ姿を変えて見せたりする。

鮮やかで、美しかった。

「強いな……」

誰が言ったのだろうか。牙煉だったのかもしれないし、出雲だったのかもしれない。もしくは見ていた誰かだったのかもしれない。しかし、そこにいたすべての者が目の前の者を見てそう思っていた。

「少し・・・、本気を出させてもらおうか。ここまで面白い相手は初めてだからな」

「へえ、まだ本気じゃなかったのか。いいさ、来いよ。受け止めて倍返しにしてやるさ。俺が諦めない限りはな」

バチツバチツバチツバチツバチ

牙煉の周囲から異様な音が流れる。それは、特殊な生き物いがいの普通の生き物としては、普通はならせるはずのない音。

電撃の音である。

牙煉の体には紅蓮の雷が纏わりつく。さらには、紅蓮の炎も。

「能力持ちでな、雷と炎を操ることができる。これに三十秒も耐えた者はいない。せめて10秒は耐えろ」

そう言い終わるか否かのタイミングで、さらに周囲へと放出される鬼神の妖力は跳ねあがる。

そして出雲へと殴りかかり、その腕は出雲の頭を『貫いた』……

[illegible]

「きやあああ」

「え、おい」

「うそだろ」

鬼達からもどよめきの声が発せられる。

「……。いくら強いても所詮は人間か……。」

すまぬ、薬師出雲よ」

牙煉は顔に悲しみを浮かべながら、出雲の頭から腕を抜こうとした。

いくら強く引こうが、牙煉の腕はまったく動かない。抜ける気配すらない。

「勝手に殺すなよ、鬼神」

その声は、鬼神の度肝を、さらには観客の鬼達の度肝をも抜いた。なぜなら上空から声が聞こえてきたからだ。

恐る恐る鬼神が上を向くと、薬師出雲が傷一つない状態で宙に立っていた。

「な・・・ぜ・・・？」

「簡単だ。おれもお前と同じように能力もちさ。俺の場合は自然を操れる。今お前の腕が貫いているのはただの丸太だ。光という自然を操ってここに居る鬼達からは俺に見えるようにした。そして、硬度と粘着力を底上げした。だからいまお前の腕は抜けないんだよ」

「なんだと？」

牙煉の顔には何時の間にも、という疑問が浮かんでいたが、あえて出雲はそこを無視する。

「まあ、今の状況は確実に俺の方が有利だな。嘘が嫌いな鬼の前でこういう小手先の技は余り使いたくなかったけどな、これが俺流だ。さて、今度は俺の番だ」

そう言うなり、出雲の手には青白いような光が大量に集まっている。

「エンシェントマスターアスパアアアアアアアアク」

鬼神を巨大な光が飲み込んだ。

月夜の晩に語る

「いやあ、まさか負けるとは思わなかった」

「ただの偶然だ。次に最初っから本気を出されたら負けるよ」

「どうも、出雲薬師だ。」

鬼神大雉牙煉に勝ったから後は戦わなくていいらしい。ということで、これまで泊めてもらっていた葉華と美月の屋敷に居候させてもらうことになり、俺の正面には『鬼神』大雉牙煉が杯と徳利を片手に座っている。

「満月の月夜の酒は格別だな」

「ああ………」

俺も右手に持った杯で酒を飲み、上を見上げ金色に輝く満月を見上げる。

月………か………。

月にうさぎってのは本当にいるのだろうか？

火のないところに煙は立たない。

噂にも何らかのはじめがあるはずだ。それはもしかしたら本当にうさぎがいたのかもしれないし、月の模様がウサギに見えたからなのかもしれない。未来では分からなかったことだ。

いない、ことになってはいる。見つかっていないし、月に生き物が生きて行くのに水が無いんだっただけか？俺はあんまりそういうことに詳しくはなかったからな。

「人が我ら妖のどちらかが月に住まえば争わなくてもいいのだがな………」

「おいおい、どうやって行くんだよ。それに月に住めるという確証はない」

「それもそうか」

フツ、と一瞬だけ牙煉は笑うと一息に杯に入った酒を飲む。

「一ヶ月後、宴がある」

「宴？宴会か？」

「いや、違う。我らこの山に住まうもの達は一年に一度の宴で序列を決める」

「ああ、戦か……」

鬼の序列、すなわち強さの順番。

それを決めるのは闘いでしかない。他に強さの序列を何で決めるというのだ。

鬼達にとっては闘いすら遊びのようなものでしかない。弱い妖怪にとつては生きるか死ぬかの大きな局面ではあるが……

「鬼神の名は鬼しか受け継げぬ。だが、お主も参加せぬか？」

「おもしれえ、お互いに最後の二人になるまで残るぞ」

「ふん、もう一度お主と戦うのか……。いいだろう、次こそお主に膝をつかせてやろうではないか」

「何言ってる、また俺の勝ちだ」

二人は同時に杯を煽った。

「あいつは強かったな……」

「そうだね、鬼神様が負けちゃったもん」

出雲と牙煉のいるのとは別の縁側に葉華と美月は居た。

いくら小さいとは言っても美月は鬼だ。自らの体より大きな瓢箪に酒を入れてあるらしく、普通に飲んでいる。

葉華といえば、杯を持っているものの、先ほどからあまり飲んではいないわりに頬を赤く染めている。とはいえ、人間と比べれば飲み過ぎの部類に入るのだが……

「もしかしてさあ、葉華は惚れちゃった？」

「な、バカなこというな。私が人間に惚れるわけが無かるう」

「だれも出雲のこととは言ってないよ」

「つゝゝゝ！！！！！」

「あははははははは、葉華ったら面白いんだから」
鬼とはいえ、心は人と変わらない。

人以外の生き物であったとしても感情は持ち合わせているのは当たり前だ。

彼女らなら少女の心を……。

「多分だけど出雲は鈍感だよ。まあ頑張ってね」

「うるわいわあっ」

酒瓶を棍棒のように葉華はふりまわすが、美月は全てくるくると回るようにしてかわす。

「あはははは、葉華は可愛いね」

「死ねえ」

「あははははははは」

彼女らの追いかけっこは陽が昇るまで続いた。

「なあ鬼神」

「ん、なんだ？」

酒ではなく、焼き魚を一人の青年と一人の鬼が一匹ずつ食べていた。
「俺を怨んではいけないのか？」

「何を怨む必要があるのだ？」

鬼がそう返すと、二人を静寂が包みこむ。遠くから聞こえてくる少女達のかわいらしい声を除いて。

「おまえは鬼神と言われて無敗伝説を築いてきた。それを一人の人間に崩されたことだ」

青年は箸を置き、鬼の質問に答える。

青年にとって一番気になっていたことだった。鬼神は生まれてこの方無敗だったという。それなのに、その伝説は自分が壊してしまっ

た。そして、その崩した奴と一緒に鬼神は酒を飲み、魚を喰らう。
その真意が分からなかった。

「怨んでなどおらん。友として認めただけだ」

「そうか・・・・・・・・・・」

そんな二人を満月は何時までも見守り続けた。

鬼達の宴、開宴だ。

「おいおい、この前いなかったのもいないか？」

「当たり前だ、この前は人に興味など無いと言ってこないのがいたからな」

「あつそ」

どうも、薬師出雲だ。今日はまあ、あれだ。宴だ。ようは殺しあいつてことだ。あ、でも殺すのはルール違反なんだよな。

まあとりあえず宴のためにこの前の広場に來たんだが……………。

俺の言葉にもあつたように数が確実に増えている。

「半刻後に開戦だ。それ以降は誰が何時どこで誰に仕掛けても問題ない。たとえその攻撃の対象が既にほかの敵と戦っているがな」

「じゃあチームで戦っている奴もあり得るのか？」

チームとは他から見では分からなくとも、取りあえず一緒に戦うかという奴はいるはずだ。

人間なら。鬼ならどうかは知らんが……………。

「何人かはいるだろうな。だが、基本的にこの宴は個人の力量を図るためのものだ。数は少ない」

「……………じゃあ、乱戦か」

「ああそうだ」

面白そうじゃねえか。最初っから全開でよさそうだな。

「最後に会おうぜ」

「よかろう……………」

俺と鬼神は反対側に向かって歩き出した。

「宴、開幕だああああアアア」

どこからか聞こえる鬼神の声と同時に全ての鬼が、自分の周囲にいるものに襲い掛かる。その中には老若男女の例外は一切ない。

どんなに年をとっているように見える鬼も、周囲の者に襲われたり、襲っていたりする。

「派手だねえ」

そんな中、周囲にたくさんの鬼が居ながら、誰もが攻めあぐねている人間が一人いた。

そして、その人間も周囲にたくさんの鬼が居ながら一切焦ったそぶりは見せない。それどころか楽しんでいるようにも見える。

「来ないなら俺から行くぜ？」

その人間の言葉に鬼達が身構えた瞬間、人間の前方にいた鬼が吹き飛んだ。

出雲は自分の前方にいた鬼を殴り吹き飛ばすと、右足を軸に回転するように振り返り、同時に右手をのばす。そして、右手には光が集まる。

「マスタアアアスパアアアアアク」

光は放たれ、先ほどまで出雲を囲んでいた鬼、さらには周囲で戦っていた鬼、総勢100名以上を一撃でのみこんだ。

「お疲れ様」

出雲は自分に向けて呟いた。

「あっちはすごいな」

「ほらほら、私達も始めようよ葉華」

周囲には、気絶した鬼が大量に転がっており、真ん中には二人の少女の鬼が服を軽くボロつとさせながらもほとんど無傷で立っていた。そして、彼女らも共闘していたわけではないらしく、相手に向けフアイティングポーズをとっている。

「ああ、どっちが勝っても怨みつこなし」

「相手を殺すもなし」

「手を抜いたら」

「絶交だ」

右手を限界まで硬くかため、二人は相手に殴りかかった。

「すごいものだな」

「ああ、すごいだろ？」

一人の鬼と、一人の人間がついに遭遇した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9047y/>

東方薬師見聞録

2011年12月3日22時48分発行